

平成 30 年度

人間生活学総合研究科教授内容

教育福祉学専攻

東京家政大学大学院

## 30 シラバス 教育福祉学専攻

## (6) 教育福祉学専攻(修士課程)

区分	授 業 科 目	単位数	必選別	担 当 教 員	備考(シラバスページ)
生涯学習・社会教育分野	生涯学習学特論	2	選	講師 宮地孝宜	高専 P1
	生涯学習学演習	2	選	講師 宮地孝宜	高専 P3
	社会教育学特論	2	選	教授 山本和人	高専 P5
	人間教育学特論	2	選	教授 山本和人	高専 P7
	教育福祉学特論	2	選	教授 井森澄江	高専 P8
	学校カウンセリング演習	2	選	講師(兼任) バーンズ 亀山 静子	高専 P9
	障がい者教育特論	2	選	兼任講師 半澤 嘉博	高専 P10
社会福祉学分野	社会福祉学特論Ⅰ	4	選	教授 平戸ルリ子	高専 P11
	社会福祉学特論Ⅱ	2	選	准教授 田中 恵美子	高専 P13
	社会福祉学特論Ⅲ	2	選	准教授 松岡 洋子	高専 P14
	精神保健福祉特論	4	選	講師 福 富 律	高専 P15
	スクールソーシャルワーク特論	2	選	講師(兼任) 澁谷 昌史	高専 P17
	現代家族法特論	2	選	講師(兼任) 金子 和夫	高専 P19
心理学分野	発達心理学特論	4	選	教授 井森澄江	高専 P20
	臨床心理学特論	2	選	客員教授 近 喰 ふじ子	高専 P22
	心理学特論	2	選	准教授 佐藤 隆弘	高専 P23
	教育評価・測定法	2	選	兼任講師 井上 俊哉	高専 P25
	検査法演習	2	選	教授 井森澄江	高専 P26
	高齢者心理学特論	2	選	客員教授 西村 純一	高専 P27
研究法分野	社会調査法Ⅰ	2	選	教授 山本和人	高専 P28
	社会調査法Ⅱ	2	選	教授 山本和人	高専 P29
	心理学研究法Ⅰ	2	選	教授 井森澄江	高専 P30
	心理学研究法Ⅱ	2	選	教授 井森澄江	高専 P31
研究指導	特 別 研 究	10	必	教授 井森澄江 平戸ルリ子 山本 和人	P32
	課 題 研 究	6	必	准教授 佐藤 隆弘 田中 恵美子 教授 井森澄江 平戸ルリ子 山本 和人	P33

※研究指導は、2科目のいずれかを選択必修。

※教職課程については、免許種別に、備考欄に記載した授業科目から24単位以上を履修する。

授業科目名：生涯学習学特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：宮地孝宜
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>生涯学習に関わる理念を理解し、説明することができる。</p> <p>生涯学習に関わる理論を理解し、説明することができる。</p> <p>それぞれの領域の研究成果、知見を理解し、説明することができる。</p> <p>生涯学習に関わる研究方法を理解し、計画することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>ユネスコの生涯教育論を出発点とするこれまでの政策動向、生涯学習を支援するための諸方策について、幅広く取り上げる。ただし、受講者のこれまでの学習状況により、授業内容を変更する場合もある。なお、本授業は、社会教育・生涯学習の現場におけるリーダー（高度専門職業人）としての人間性と広い視野の獲得を目指すものである。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：ガイダンス</p> <p>第2回：ユネスコの生涯教育論</p> <p>第3回：OECDのリカレント教育論</p> <p>第4回：その他の生涯教育・生涯学習論</p> <p>第5回：日本における生涯学習政策の展開</p> <p>第6回：生涯学習の実態</p> <p>第7回：学習者の特性と成人教育の理論</p> <p>第8回：生涯学習の方法</p> <p>第9回：生涯学習の支援者</p> <p>第10回：生涯学習の施設</p> <p>第11回：生涯学習における評価</p> <p>第12回：生涯学習とネットワーク</p> <p>第13回：現代的課題と生涯学習</p> <p>第14回：生涯学習に関する研究方法</p> <p>第15回：授業のまとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>授業前にはテキストおよび事前配付資料を熟読しておくこと。専門用語は事前に調べておくこと。なお、本準備学習には1時間程度の時間が必要である。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>日本生涯教育学会年報各号</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>日本生涯教育学会年報各号</p>			
<p>学生に対する評価：</p>			

### 30 シラバス 教育福祉学専攻

出席、演習課題、最終レポートの3面から評価する。全回数の2/3以上の出席を条件に評価する。評価割合は、授業への参加態度・演習課題50%、最終レポート50%とする。レポートについては、第15回前に提出し、第15回の授業のまとめにおいて、レポート内容についてフィードバックを行う。

授業科目名：生涯学習学演習	単位数：2単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名：宮地孝宜
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>成人教育および成人教育者の役割について理解し、説明することができる。</p> <p>成人教育の方法について理解し、説明することができる。</p> <p>成人教育プログラムを作成することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>上記を達成するために、テキストにして指定したパトリシア・A・クラントンの著書の輪読を中心に、成人教育および成人教育者の役割について検討する。具体的なテーマは授業計画の通りである。成人教育実践者をゲストとして招き、成人教育プログラムの実践についてお話をいただく予定である。なお、本授業は、教育に関わる現場のリーダー（高度専門職業人）として、必要な理論と実践能力を身につけることを目指す。</p>			
<p>授業計画</p> <p>授業計画</p> <p>第1回：ガイダンス</p> <p>第2回：テキストの輪読(1)「第1章 成人教育者の養成と能力開発」</p> <p>第3回：テキストの輪読(2)「第2章 従来の能力開発の方策」</p> <p>第4回：テキストの輪読(3)「第3章 自己決定的な能力開発のための方策」</p> <p>第5回：テキストの輪読(4)「第4章 批判的なふり返し」</p> <p>第6回：テキストの輪読(5)「第5章 意識変容的な学習になる」</p> <p>第7回：テキストの輪読(6)「第6章 教育者の能力開発にみる一人ひとりの違い」</p> <p>第8回：テキストの輪読(7)「第7章 仕事や社会的背景の中での意識変容の展開」</p> <p>第9回：テキストの輪読(8)「第8章 専門職の能力開発のための新しい展望」</p> <p>第10回：テキストの輪読(9)「第9章 能力開発担当者の方策」</p> <p>第11回：成人教育プログラムの実際 ―ゲスト（成人教育実践者）による情報提供</p> <p>第12回：成人教育プログラムの検討(1)アウトプットおよびアウトカム（指標）の設定</p> <p>第13回：成人教育プログラムの検討(2)支援方策の検討</p> <p>第14回：成人教育プログラムの検討(3)評価方法の検討</p> <p>第15回：授業のまとめ</p> <p>準備学習： 授業前にはテキストおよび事前配付資料を熟読し、発表資料（レジュメ）を準備すること。なお、本準備学習には3時間程度の時間が必要である。</p>			
<p>準備学習： 授業前にはテキストおよび事前配付資料を熟読し、発表資料（レジュメ）を準備すること。なお、本準備学習には3時間程度の時間が必要である。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>トリシア・A・クラントン、入江直子・三輪建二完訳『おとなの学びを創る―専門職の省察的实践をめざして』鳳書房 2004 (Patricia A. Cranton, Professional Development as Transformative Learning)</p>			

ning: New Perspective for Teacher of Adults, Jossey-Bass 1996)

参考書・参考資料等：

日本生涯教育学会年報各号、その他は適宜紹介する。

学生に対する評価：

出席、演習課題、最終レポートの3面から評価する。全回数の2/3以上の出席を条件に評価する。評価割合は、授業への参加態度・演習課題50%、最終レポート50%とする。レポートについては、第15回前に提出し、第15回の授業のまとめにおいて、レポート内容についてフィードバックを行う。

授業科目名：社会教育学特論	単位数：2単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名：山本和人
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>初めて社会教育を学ぶ院生には、社会教育の特徴を理解し、現状と課題を明確に理解することが求められる。また、既に社会教育について知識を持った院生には、どのような視点から研究及び実践的な課題解決に向けた取り組みができるかを考えることができるように指導する。そして、「社会教育の理解と生涯学習の推進過程および今後の方向」を理解できるよう指導する。特に学校教員を目指す者には、社会教育の重要性ならびに学校、家庭、地域社会のつながりの必要性を理解できるよう指導する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>社会教育学特論の講義では、学校教育に比較して理解しにくい社会教育について、教育学における社会教育学の位置、生涯学習学との関連性を検討した上で、最近の教育学研究の動向と実践を踏まえ、学校教育、家庭教育、地域社会と関わり方を、事例に基づきながら理解する。また、第二次世界大戦後発展した柔軟な教育領域である社会教育が、どのような経過の中で今日的な社会教育行政の制度となっているか、さらには、社会教育、生涯教育、生涯学習の概念検討と今後の方向についても検討する。授業は講義を中心に行うが、履修者の問題意識に応じて、実践現場や行政の実態についての主体的な調査を取り入れる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：法律上の定義による学校教育と社会教育、及びその行政制度</p> <p>第2回：教育学における社会教育および生涯学習概念</p> <p>第3回：社会教育の歴史と行政</p> <p>第4回：社会教育の対象とその理解</p> <p>第5回：社会教育の方法と施設</p> <p>第6回：社会教育における指導者と専門職員の役割</p> <p>第7回：生涯教育と生涯学習について</p> <p>第8回：学校教育と社会教育の連携、融合と行政制度</p> <p>第9回：高等教育機関、民間教育産業と社会教育行政</p> <p>第10回：国の各種審議会の答申・建議・報告の流れ</p> <p>第11回：生涯学習支援システムの理解と具体的事業や取組</p> <p>第12回：学習成果の評価を必要とする社会教育</p> <p>第13回：学校、家庭、地域社会の連携・協力とその推進</p> <p>第14回：「知の循環型社会」の構築と社会教育の推進</p> <p>第15回：生涯学習社会の形成にはたす社会教育の役割</p>			
<p>準備学習：各回のテーマに応じ、毎回1、2時間が必要と思われる。また、事後についても、調べ学習や意見のまとめを課するので、それなりの時間が必要と考えられる。</p>			
<p>テキスト：未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：未定</p>			

### 30 シラバス 教育福祉学専攻

学生に対する評価：生涯学習社会の中で、社会教育の領域と方法、対象等についての理解と、学校教育、家庭教育との関わりと必要性を明確に理解できているかどうかを、平常点20%、小レポート30%、最終レポート50%によって評価する。

授業科目名：人間教育学特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：山本和人
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>人間が教育によってはじめて人間となることを深く理解し、必要な環境や条件、教育方法等について、教育学諸分野の知見を深める。特に、日本の戦後において求められてきた「人間像」の変遷を振り返るなかで、人間教育のあり方と、教育について考える基本的視点を学ぶ。</p> <p>テーマとしては、「日本の戦後社会と教育」をテーマとする</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人間の個人的な発達、家庭に始まり、学校や社会の中での教育的働きかけで達成されていく。そのプロセスの中で、いかなる環境・条件で、いかなる方法で、どのような教育が行われていくのか、について検討する。また、集団や社会の状況とそこで求められる「人間像」についても検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：人間の発達・成長とその理論①発達段階</p> <p>第2回：人間の発達・成長とその理論②発達課題</p> <p>第3回：家庭・学校・社会での教育</p> <p>第4回：家庭教育とその方法</p> <p>第5回：学校教育の特殊性</p> <p>第6回：社会教育の多様さと「力」</p> <p>第7回：学校と教育をめぐる「制度」</p> <p>第8回：カリキュラムと人間</p> <p>第9回：社会化の理論</p> <p>第10回：戦前の日本社会と教育</p> <p>第11回：教師の仕事と役割</p> <p>第12回：求められる「人間像」と社会</p> <p>第13回：能力と評価</p> <p>第14回：価値と人間</p> <p>第15回：教育の「可能性」</p>			
<p>準備学習：</p> <p>教育学関係の書籍、特に、教育概論や教育原理など、何か1冊を読んでおき、講義テーマと関連する深めたいテーマを持っておいてほしい。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>授業の中で提示する。複数冊になる。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>必要な場合、授業の中で提示する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>毎回の討議50%、および、最終レポート50%の評価による。</p>			

授業科目名：教育福祉学特論	単位数：2単位	選択： (高専 (公民))	担当教員名：井森澄江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>人間の発達と家庭環境、特に親子関係との関連について発達心理学の知見と研究法を学び、問題のあるケースにどのような援助をしていったらいいのか考えられるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人間の発達と家庭環境、特に親子関係との関連について、発達心理学の観点から学ぶ。各時期の親子関係について概略を学んでから、子どもの発達と家庭環境をめぐる重要な論文の講読を行い、地域社会や学校にあって人を支援するために必要な知識や技術、また社会的決定への示唆についても学ぶ。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：人間の発達と家庭環境</p> <p>第3回：乳児期の親子関係</p> <p>第4回：「子どもの養育に心理学がいえること」の講読 (1) 愛着形成</p> <p>第5回：幼・児童期の親子関係</p> <p>第6回：「子どもの養育に心理学がいえること」の講読 (2) 親からの分離の影響</p> <p>第7回：青年期の親子関係</p> <p>第8回：「子どもの養育に心理学がいえること」の講読 (3) 父親と母親</p> <p>第9回：成人期の親子関係</p> <p>第10回：「子どもの養育に心理学がいえること」の講読 (4) 両親の離婚・争いの影響</p> <p>第11回：文化と親子関係</p> <p>第12回：「子どもの養育に心理学がいえること」の講読 (5) 家庭の貧困・体罰の影響</p> <p>第13回：関連した文献講読 (1) 乳幼児期</p> <p>第14回：関連した文献講読 (2) 青年・成人期</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習 (予習・復習等)</p> <p>テキストの決められた章を読み、プレゼンの準備をする。(2～3時間)</p>			
<p>テキスト</p> <p>「子どもの養育に心理学がいえること－発達と家庭環境」シャファー 新曜社</p> <p>「こころの旅－発達心理学入門」山岸明子 新曜社</p>			
<p>参考書・参考資料等</p> <p>授業時に提示する</p>			
<p>学生に対する評価</p> <p>授業への参加態度30%、演習課題40%、最終レポート30%とする。演習課題については発表時にフィードバックを行う。</p>			

授業科目名： 学校カウンセリング演習	単位数：2単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名： バーンズ亀山静子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校臨床心理学やカウンセリングの意義と役割を明らかにしその理論と実際について理解を深める。</li> <li>・学校臨床心理学の展開として、児童生徒の学校生活への適応の方法について理解を深める。</li> <li>・学校臨床心理学の実際として児童生徒、教職員、保護者への支援の理解を深める。</li> <li>・アメリカ合衆国、諸外国の学校臨床心理学の理解を深める。</li> </ul>			
<p>授業の概要</p> <p>学校カウンセリングの意義と役割を明らかにし、学校カウンセリングの理論と実際について理解を深める。具体的には、学校臨床心理学の理論と実践的課題について、単一理論の安易な適応論ではなく、本質的な心理学的な課題について質疑を深めていきたい。また諸外国における学校カウンセリングや学校臨床心理学の現状課題を検討し対応の視点を深める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：現代の子どもたちを取り巻く環境と学校臨床心理学  第2回：学校臨床心理学と学校生活適応における問題  第3回：学校臨床心理学と学習障害  第4回：学校臨床心理学と注意欠陥多動性障害  第5回：学校臨床心理学と自閉症スペクトラム  第6回：学校臨床心理学の展開と指導的支援  第7回：学校臨床心理学の展開と心理的支援  第8回：学校臨床心理学の展開と環境的支援  第9回：学校臨床心理学の実際 開発的支援と精神疾患  第10回：学校臨床心理学の実際 予防的支援  第11回：学校臨床心理学の実際 教職員への支援  第12回：学校臨床心理学の実際 保護者への支援  第13回：アメリカにおける学校臨床心理学  第14回：諸外国における学校臨床心理学  第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>毎週、授業の最後に小レポート提出。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>グラフィック学校臨床心理学 (2010年、サイエンス社) 、配布資料</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>未定</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業参加、レポート</p>			

授業科目名：障がい者教育特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：半澤嘉博
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>障がい者の社会参加・自立に向けての学校教育、社会教育、家庭教育の在り方についての現状を把握し、基本的な認識を持つ。また、個別の支援計画を活用した具体的な支援や教育体系の在り方について考察する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>平成19年度からの特別支援教育への転換により、様々な障害者の教育は、個別の教育ニーズへの支援という視点から大きく見直しがなされている。また、障害者の権利条約の批准や共生社会づくりに向けてのインクルーシブ教育の重要性が示されている。このような状況を踏まえ、障害者教育の在り方や個別の支援計画の作成・実施を実践的に積み重ねていくことが重要である。知的障害や発達障害の事例を通して、具体的な支援の在り方を検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：特別支援学校や福祉施設、一般企業等における障がい者の実態把握（知的障がいを中心に）</p> <p>第2回：個別の指導計画、個別の支援計画の考え方</p> <p>第3回：個別の指導計画、個別の支援計画の作成</p> <p>第4回：障がい者の支援の実践（1）及び評価（学校教育を中心に）</p> <p>第5回：障がい者の支援の実践（2）及び評価（社会教育を中心に）</p> <p>第6回：障がい者の支援の実践（3）及び評価（家庭教育、家庭支援を中心に）</p> <p>第7回：指導実践の報告、事例検討</p> <p>第8回：障害者の権利条約とインクルーシブ教育について</p> <p>第9回：発達障害者の教育と福祉、労働について</p> <p>第10回：個別の支援計画と関係機関との連携について</p> <p>第11回：発達障害者の支援の実践（1）及び評価（LD、ADHD）</p> <p>第12回：発達障害者の支援の実践（2）及び評価（自閉症全般）</p> <p>第13回：発達障害者の支援の実践（3）及び評価（高機能自閉症、アスペルガー症候群）</p> <p>第14回：指導実践の報告、事例検討</p> <p>第15回：まとめ（最終レポート）</p>			
<p>準備学習：特別支援学校、学習指導要領を読んでおくこと。</p>			
<p>テキスト： 特になし。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 必要な資料は適宜配布する。</p>			
<p>学生に対する評価： 出席、課題演習、最終レポートの3面から評価する。全回数の2／3以上の出席を条件に評価する。評価割合は、演習課題50%、最終レポート50%とする。</p>			

授業科目名：社会福祉学特論 I	単位数：4単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名：平戸ルリ子
授業の到達目標及びテーマ 社会福祉の諸理論を学び、現状や課題を理解できる。社会福祉の今後の動向について考察できる。			
授業の概要 前半は基礎文献を用い、社会福祉がどのように変化・発展してきたかを理解する。後半は、急速な社会変動と、それに伴う生活ニーズの変化に対応した近年の福祉改革に注目し、社会福祉の制度・対象・支援・財源等がどう変わろうとしているのか、課題と今後の見通しについて、ディスカッション等を交え認識を深める。ゲストスピーカーや現場機関の訪問も予定している。			
授業計画 第1回：オリエンテーション。授業の進め方の説明と受講生の講義に対するニーズの確認 第2回：社会福祉とは何か。「社会福祉」の言葉の変遷と理解 第3回：慈善事業の段階と公的扶助 第4回：貧困問題と社会事業の展開、救済に伴うスティグマ 第5回：権利としての社会福祉の位置づけと現実理解。 第6回：社会福祉学とは何か、社会福祉研究の特質を理解する。「実践現場」の視点と「研究」のバランス理解。 第7回：社会福祉研究の諸理論の理解 1 制度研究と援助技術論研究 第8回：社会福祉研究の諸理論の理解 2 孝橋、岡村、三浦、一番ヶ瀬など諸理論の特徴と理解 第9回：社会福祉研究の諸理論の理解 3 量的調査研究と質的事例研究の進め方。 第10回：社会福祉研究の諸理論の理解 4 社会福祉の国際動向と日本の比較検討 第11回：ゲストスピーカー 歴史研究もしくは実践研究の研究者を招いての社会福祉研究の紹介 第12回：実践からの問題提起、課題設定について考える。受講生によるディスカッション。 第13回：急速な社会変動と社会構造の変化生活ニーズの変化。 第14回：生活ニーズの変化と社会福祉サービスに求められるものの変化。 第15回：社会福祉の主体と客体の変化。 第16回：社会福祉改革の背景と内容。 第17回：社会福祉における公私の役割分担とその移り変わり 第18回：指定管理制度と公的機関の今後。 第19回：社会福祉サービスの手続き変更と仕組みの理解 第20回：措置制度と契約制度の長所と短所。それぞれの意義。 第21回：費用の自己負担制度の変更点と課題 第22回：アセスメントとサービス評価。その利用の仕方と意義。 第23回：現代の社会福祉現場の実情の理解。特に児童福祉現場の変化を中心に 第24回：措置機関としての児童相談所ワーカーのお話。児童・家庭福祉の問題の複雑化と対応。 第25回：社会福祉改革が進む実践現場の見学とワーカーのお話			

30 シラバス 教育福祉学専攻

第26回：社会福祉の実践現場のワーカーとの質疑応答（2コマ連続で実施）

第27回：社会福祉の現場における支援の特徴 当事者理解と自己決定の尊重

第28回：社会福祉の現場実践における支援の課題

第29回：医療や教育・心理など関連領域と社会福祉の関係と今後。

第30回：社会福祉の課題と展望

準備学習：毎時間後にレポートを提出し、次の講義に向けての問題意識を明確にして臨むこと。

テキスト：

使用しない。

参考書・参考資料等：

講義の中で、受講生にあわせ提示する。

学生に対する評価：

授業の参加の態度50%、レポート50%

授業科目名：社会福祉学特論Ⅱ	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：田中恵美子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 障害の多様性について想像力をもって理解することができる。</li> <li>・ 障害の切り口から見える現代社会の課題について理解することができる。</li> <li>・ 障害のある人とともに生きる社会のあるべき姿について考察することができる。</li> </ul>			
<p>授業の概要</p> <p>社会福祉学特論Ⅱでは、社会福祉分野において専門的研究を進めるために必要な障害に関する知識の習得を目指す。特に障害の社会モデルの考え方に則り、多様な障害のとらえ方について理解を深める。授業では内外の文献にあたるほか、ゲスト講師などを交えての議論も検討する。より実践的な知識・技術の習得を目指して、可能であればフィールドワークも行いたい。各自の関心テーマに沿ったプレゼンテーションの機会を与える予定なので、各自が活動・議論に積極的に参加し、自分の意見をまとめ他者に伝える技術の習得も行えるようにしたい。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：障害のイメージ</p> <p>第2回：障害の社会モデルについて（1）フィンケルシュタイン、オリバー等の理論</p> <p>第3回：障害の社会モデルについて（2）ろう宣言、障害の文化モデル、女性障害者の主張</p> <p>第4回：優生学－障害の意味</p> <p>第5回：自立生活運動（1）歴史－日本</p> <p>第6回：自立生活運動（2）歴史－アメリカ・イギリス他</p> <p>第7回：自立生活を支える制度（1）パーソナルアシスタンス、ダイレクトペイメント</p> <p>第8回：自立生活を支える制度（2）日本の状況</p> <p>第9回：自立生活を支える制度（3）欧米の状況</p> <p>第10回：自立生活の実践 ゲスト・スピーカー（自立生活者）による講演 レポート課題の提示</p> <p>第11回：発表（1）理論 参加者の問題関心に沿って</p> <p>第12回：発表（2）実践 参加者の問題関心に沿って</p> <p>第13回：発表（3）展開 参加者の問題関心に沿って</p> <p>第14回：発表（4）現状 参加者の問題関心に沿って レポートの提出</p> <p>第15回：まとめ レポートへのコメント、フリーディスカッション</p>			
<p>準備学習：予習として障害者の生活に係る制度について、歴史的にまた現状についてあらかじめ大まかに学習しておくこと。また授業内で提示される資料を次回までに事前学習しておくことが求められる。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>なし 必要に応じてレジュメを配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>その都度提示する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業内での積極性 40% レポート等課題提出 60%</p>			

授業科目名：社会福祉学特論Ⅲ	単位数：2単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名：松岡洋子
<p>授業の到達目標及びテーマ：</p> <p>1990年代の世界的潮流であり、日本でも制度・政策化が進みつつあるエイジング・イン・プレイス（地域居住）の理論と実践について国際的視点より理解を深め、日本の課題について考察する。</p>			
<p>授業の概要：</p> <p>エイジング・イン・プレイス（地域居住）概念と実際について、内外の文献をもとに高齢者居住（住宅政策）と地域ケア（ケア政策）の理論を踏まえながら学ぶ。日本の課題については実証的な調査手法と結果を踏まえて、考察を行う。論文を批判的に読むことを通して、論文の構成、調査手法、論旨の進め方などについても副次的に学ぶ。授業形式は、講義に参加型形式を取り入れる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：エイジング・イン・プレイスという概念  第2回：エイジング・イン・プレイスという概念  第3回：エイジング・イン・プレイスと高齢者居住(住宅改築)  第4回：エイジング・イン・プレイスと高齢者居住(住宅改築)  第5回：エイジング・イン・プレイスと地域ケア(ケア政策)  第6回：エイジング・イン・プレイスと地域ケア(ケア政策)  第7回：エイジング・イン・プレイスと地域福祉  第8回：エイジング・イン・プレイスと地域福祉  第9回：諸外国の実践（1）アメリカ、イギリス  第10回：諸外国の実践（2）オランダ  第11回：諸外国の実践（3）デンマーク  第12回：日本の課題（1）：日本の住宅政策・ケア政策の歴史  第13回：日本の課題（2）：課題を評価する調査手法  第14回：日本の課題（3）：日本への政策提言  第15回：まとめ、レポート提出</p>			
<p>準備学習：</p> <p>授業前には、指示のあった部分についてテキストを読んで理解してくること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>「エイジング・イン・プレイスと高齢者住宅：日本とデンマークの実証的比較研究」</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>資料は折に触れて紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業の質疑への参加状況、資料作成と発表、レポートの提出。評価の比率は、授業への参加0.2、資料作成と発表0.4、レポートの提出0.4とする。</p>			

授業科目名：精神保健福祉特論	単位数：4単位	選択： (高専(公民))	担当教員名：福富 律
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・精神保健福祉分野の基礎を学び、近年の動向を論じることができる。</li> <li>・ソーシャルワーク実践の基礎理論と精神保健福祉分野の地域生活支援活動との関連を論じることができる。</li> <li>・先駆的な実践を学び、各自の研究テーマと関連づけて検討できる。</li> </ul>			
<p>授業の概要</p> <p>精神保健福祉分野における実践を、ソーシャルワーク研究の観点を持ち、フィールドワークを通して理解する。現場実践に寄与できる研究、実践力を高めることにつながる研究を意識して、双方向に授業を展開する。多種多様な環境、地域性を踏まえて行われてきた各地の実践の特性を検討することから、現在求められている実践に示唆するものは何かを探る。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：精神障害者の地域生活支援活動の意味</p> <p>第2回：精神障害者の地域生活支援活動の現状（文献等からの情報収集）</p> <p>第3回：精神医療・保健・福祉に関する法制度の歴史</p> <p>第4回：精神障害者の処遇の歴史と制度との関連性</p> <p>第5回：諸外国における精神保健福祉（1）ヨーロッパ諸国</p> <p>第6回：諸外国における精神保健福祉（2）アメリカ、カナダ</p> <p>第7回：家族支援と家族会活動</p> <p>第8回：ピアサポートと当事者活動</p> <p>第9回：障害者総合支援法の分析</p> <p>第10回：地域生活支援に関する制度の分析</p> <p>第11回：精神障害者の地域生活と制度との関連性</p> <p>第12回：精神障害者の地域生活支援活動に関する先行研究資料の収集</p> <p>第13回：精神障害者の地域生活支援活動と居住支援</p> <p>第14回：精神障害者の地域生活支援活動と就労支援</p> <p>第15回：精神障害者の地域生活支援活動と相談支援</p> <p>第16回：精神障害者の地域生活支援活動と精神科医療（1）資料調査</p> <p>第17回：精神障害者の地域生活支援活動と精神科医療（2）精神科病院における実地調査</p> <p>第18回：精神障害者の地域生活支援活動と精神科医療（3）精神科診療所における実地調査</p> <p>第19回：相談支援事業における地域展開の経過と現状</p> <p>第20回：相談支援事業のモデル（1）「帯広ケアセンター」資料調査</p> <p>第21回：相談支援事業のモデル（2）「豊芯会」実地調査</p> <p>第22回：相談支援事業のモデル（3）「やどかりの里」実地調査</p> <p>第23回：相談支援事業とケアマネジメント</p>			

30 シラバス 教育福祉学専攻

第24回：相談支援事業とコミュニティワーク、ソーシャルアクション

第25回：ソーシャルワーク実践としての地域生活支援活動（1）理論史からの分析

第26回：ソーシャルワーク実践としての地域生活支援活動（2）援助関係論からの分析

第27回：ソーシャルワーク実践としての地域生活支援活動（3）グループ理論からの分析

第28回：ソーシャルワーク実践としての地域生活支援活動（4）新しい取り組みの評価

第29回：ソーシャルワーク実践としての地域生活支援活動（5）各自の研究との関連づけ

第30回：まとめ

準備学習：精神保健福祉分野における基礎文献を読んで、精神医学、精神保健学、精神保健福祉論の概略を学んでおくこと

テキスト：

特に定めない（履修者の基礎知識によっては、相談の上で指定することもあり得る）

参考書・参考資料等：

随時紹介する

学生に対する評価：

平常点50%、課題レポート50%

授業科目名： スクールソーシャルワーク特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：澁谷昌史
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>テーマは、「子どもの福祉と社会—家庭・学校・地域の重層的な社会システムの中で子どもの育ち・育てのための適切なリソースを探すために」である。本科目履修後には、受講生が、子ども家庭福祉の理念・制度・方法のうち、とくに学校システムと関連させて行われている調査研究を批判的にリヴェーすることにより、「広義のスクールソーシャルワーク」の研究・教育をする能力を養う。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>子ども家庭福祉分野におけるソーシャルワーカーの役割は、子どもが社会（もちろん学校システムも含む）の中で多様なリソースを用いてナビゲートしていけるようにすることであり、そのために「調査研究にインフォームドされた実践」の普及にかかる強い意欲を持つことが大事である。具体的には、調査研究論文の渉猟・精読・批判的分析を通して、そこで得られる知識が受講生の研究・教育活動の基盤となるように方向づけていく。その結果、スクールソーシャルワークに関係する学術的テーマに関して、学会において論文等により問題解決に向けた知見の発信を行い、あるいはソーシャルワークの実践現場において科学的な根拠のある問題解決型実践を展開することができるようになるなど、教育福祉学専攻の学位授与方針に即した能力形成を図る。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：シラバスの概要についての理解を促す</p> <p>第2回：子ども家庭福祉の理念と学校教育—歴史的経緯</p> <p>第3回：子ども家庭福祉の制度と学校教育—行政機構</p> <p>第4回：子ども家庭福祉の制度と学校教育—ネットワーク制度化の意義</p> <p>第5回：子ども家庭福祉の実践と学校教育—地域組織活動と学校の役割</p> <p>第6回：子ども家庭福祉の実践と学校教育—福祉教育の課題</p> <p>第7回：子ども家庭福祉の実践と学校教育—放課後対策の課題</p> <p>第8回：子ども家庭福祉の実践と学校教育—特別な支援を必要とする子どもを中心に</p> <p>第9回：子ども家庭福祉の専門教育とスクールソーシャルワーク：人材養成</p> <p>第10回：受講生による発表—研究動向の全体像</p> <p>第11回：受講生による発表—貧困対策等</p> <p>第12回：受講生による発表—いじめ等</p> <p>第13回：受講生による発表—社会的養護等</p> <p>第14回：受講生による発表—特別支援教育等</p> <p>第15回：本講義を通して学んだことの総括</p>			
<p>準備学習（予習・復習等）</p> <p>図書館のデータベースを積極的に活用するなどの方法により、おおむね90分間で、毎授業前に関連する</p>			

30 シラバス 教育福祉学専攻

トピックについての文献リストを作成する。

テキスト

指定しない。

参考書・参考資料等

随時紹介する。

学生に対する評価

授業への参加態度及び口頭発表課題の2面から評価する。評価割合は、授業への参加態度50%、口頭発表課題50%とする。フィードバックは、発表等が行われたその場で行う。なお、全回数の2/3以上の出席及び口頭発表の実施を条件に評価する。

授業科目名：現代家族法特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：金子和夫
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>社会福祉や教育の実践現場において、高齢者や児童、障がい者等の生活支援に必要とされる家族法について、その基礎を理解し説明できるとともに、課題が考察できるようになることを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>家族法は民法の親族法と相続法からなるが、この授業では、おもに親族法の理解を深めることを目的とする。具体的には、社会福祉の現場における権利行使や権利救済等の観点から、親族法・相続法に係わるいくつかの問題をテーマとして設定し、実態・法制度(判例を含む)・課題等について受講生とディスカッションを行いながら授業を展開する。テーマとしては、現代社会における家族形態の変化、婚姻・離婚、親子関係、扶養関係、相続の領域に関する問題を取り上げ、各種統計資料や新聞等で実態を明らかにしたうえで、それに対応する法制度・政策研究、判例研究を行い、課題を検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：現代における家族形態の変化とその影響</p> <p>第2回：婚姻と離婚に関する法制度</p> <p>第3回：婚姻と離婚に関する判例研究と課題検討</p> <p>第4回：DV(配偶者間暴力)に関する実態、法制度、課題検討</p> <p>第5回：親子関係(嫡出子・非嫡出子(婚外子)・養子)に関する実態把握と法制度</p> <p>第6回：親子関係に関する判例研究と課題検討</p> <p>第7回：親権に関する法制度と判例研究</p> <p>第8回：児童虐待の実態把握と児童虐待防止法、行政機関の役割と課題</p> <p>第9回：扶養(特に老親扶養)に関する実態と法制度、判例研究</p> <p>第10回：社会的扶養と私的扶養の関係、生活保護の実態と課題、行政機関の役割と課題</p> <p>第11回：高齢者虐待の実態と法制度、行政機関の役割と課題</p> <p>第12回：相続に関する法制度と判例研究、課題検討</p> <p>第13回：成年後見制度の実態と法制度</p> <p>第14回：成年後見制度の判例研究と課題検討</p> <p>第15回：まとめ ディスカッション</p>			
<p>準備学習：テーマの内容に関して統計資料や新聞記事等でその実態を把握すること。自ら調べた資料は持参し、また配布された資料を必ず読んでディスカッションできる準備をすること。</p>			
<p>テキスト：使用しない。必要に応じて資料を配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：『社会福祉小六法』ミネルヴァ書房、政府刊行白書、関係機関のHP、新聞、専門雑誌等(具体的には授業内で指示する)</p>			
<p>評価方法：授業の参加態度50%、レポート50%</p> <p>(出席は2/3以上の出席を条件に評価するが、大学基準協会では全出席を求めています)</p>			

授業科目名：発達心理学特論	単位数：4単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：井森澄江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>生物的存在でありながら社会的存在である人間の生涯にわたる発達について、発達に関する諸理論・学説を検討し、各発達期の課題・問題の意味について理解を深める。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>生物的存在でありながら社会的存在である人間の生涯にわたる発達について、まず、発達に関する諸理論・学説を概観する。その後、周産期・乳児期・幼児期・児童期・青年期・成人期・老年期各発達期の課題とその発達支援について考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：発達とは</p> <p>第3回：その生物学的基礎Ⅰ；ヒトの発達の生物学的基礎</p> <p>第4回：その生物学的基礎Ⅱ；進化心理学と進化発達心理学</p> <p>第5回：社会文化的視点Ⅰ；社会的存在としての子ども</p> <p>第6回：社会文化的視点Ⅱ；発達の社会文化論</p> <p>第7回：周産期の発達Ⅰ；胎児期の身体的発達</p> <p>第8回：周産期の発達Ⅱ；胎児の脳・運動機能・感覚機能の発達と子宮外生活への準備</p> <p>第9回：乳児期の発達Ⅰ；乳児の初期の視覚</p> <p>第10回：乳児期の発達Ⅱ；乳児の社会的能力</p> <p>第11回：乳児期の発達Ⅲ；アタッチメントの成立</p> <p>第12回：幼児期の発達Ⅰ；表象以前と表象以後</p> <p>第13回：幼児期の発達Ⅱ；ことばの発達</p> <p>第14回：幼児期の発達Ⅲ；幼児期の家族、仲間</p> <p>第15回：まとめとテスト</p> <p>第16回：児童期前期の発達Ⅰ；集団において子どもはなにを経験するのか</p> <p>第17回：児童期前期の発達Ⅱ；遊び・けんか・学びの中でのコミュニケーション</p> <p>第18回：児童期後期の発達Ⅰ；社会的事象の理解</p> <p>第19回：児童期後期の発達Ⅱ；道徳性の発達</p> <p>第20回：まとめとテスト</p> <p>第21回：青年期前期の発達Ⅰ；青年の知的発達</p> <p>第22回：青年期前期の発達Ⅱ；自己の発達—自己概念・自尊感情・自己調整</p> <p>第23回：青年期後期の発達Ⅰ；アイデンティティと青年の人格発達</p> <p>第24回：青年期後期の発達Ⅱ；職業選択</p> <p>第25回：成人期の発達Ⅰ；親になること—愛着と養育・養護</p> <p>第26回：成人期の発達Ⅱ；中年期の危機</p>			

30 シラバス 教育福祉学専攻

第27回：老年期の発達 I ;老人の知的能力

第28回：老年期の発達 II ;幸福感

第29回：ふたたび発達とは

第30回：まとめとテスト

準備学習：

授業前には指定した文献を読み、要約してくること。

テキスト：

未定

参考書・参考資料等：

授業中に指示する。

学生に対する評価：

評価割合は質疑応答(10%)、試験(90%)とする。

授業科目名：臨床心理学特論	単位数：2単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名：近喰ふじ子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>「臨床心理学」の成り立ちという入りを重要と考え、それを発端に臨床場面でのさまざまな面での取り組みについて学ぶ。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>「臨床心理学」は「応用心理学」という概念で包括されていた時代があった。すなわち、基礎心理学の応用という考え方でいいのか？ということになる。しかし、何が基礎か？と考えるとこれまた意見の分かれるところとなる。そもそも心理臨床という行為が成り立つのかどうかということにもなる。そこで、ここでは人のこころに関わる領域であると考え、こころの営みをとおしての面を重視して講義をおこなうこととする。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：臨床心理学とは何か（人間学としての理解）</p> <p>第2回：臨床心理学の対象と特質</p> <p>第3回：臨床心理学の歴史（聡明、誕生、発展を通じて）</p> <p>第4回：臨床心理学の課題</p> <p>第5回：臨床心理学としての人間理解</p> <p>第6回：正常と異常、平均と価値</p> <p>第7回：個と集団</p> <p>第8回：発達と学習</p> <p>第9回：各種心理テスト（心理検査の条件、心理検査の実際、心理検査の使われ方など）</p> <p>第10回：テスト・バッテリーについて</p> <p>第11回：精神分析理論</p> <p>第12回：個人心理学理論</p> <p>第13回：交流分析理論</p> <p>第14回：芸術療法理論</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>臨床の導入教育であることを踏まえ、興味を持って対象者理解とは何かをつねに考えておくこと。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>特に定めない</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>未定</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>出席状況と態度 課題に対する要約の仕方</p>			

授業科目名：心理学特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：佐藤隆弘
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>心理学の各領域の基本的な考え方と研究手法を説明できる</li> <li>基礎心理学の研究成果がどのような形で実践場面に応用されているのかを説明できる</li> <li>行動分析学の基礎を学び、これがどのようにして福祉、教育、医療、産業の場面に応用されているのかを説明できる</li> </ul>			
<p>授業の概要</p> <p>心理学は、行動を科学的に理解し、人がよりよく生きるための知見を提供する学問である。現代社会とそこに生きる人々は、様々な心と行動の問題を抱えており、多くの分野で心理学の重要性がますます増している。この授業では、人間の行動について理解するための心理学の考え方や研究法を学び、さらに、いかにして福祉や教育などに役立てられるのかについても検討する。特に近年、教育、福祉、医療、産業といった分野への応用という点で注目されている行動分析学の考え方とその研究法について理解する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：心理学の成り立ち</p> <p>第2回：心理学の研究法</p> <p>第3回：知覚心理学とその研究法</p> <p>第4回：認知心理学とその研究法</p> <p>第5回：発達心理学とその研究法</p> <p>第6回：学習心理学とその研究法</p> <p>第7回：社会心理学とその研究法</p> <p>第8回：行動分析学</p> <p>第9回：行動の原理</p> <p>第10回：行動のアセスメント</p> <p>第11回：行動のマネージメント</p> <p>第12回：医療・リハビリテーションと行動分析</p> <p>第13回：コミュニティ・社会問題と行動分析</p> <p>第14回：教育と行動分析</p> <p>第15回：総括</p>			
<p>準備学習：授業前に文献を読んで資料を作成し、授業中のディスカッションに備える。授業後は授業内容をレポートとして提出する。(予習・復習にそれぞれ最低1時間)</p>			
<p>テキスト：未定(初回の授業において決定する)</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>服部 繁・島宗 理(2008)『改訂版 対人支援の行動分析学—看護・福祉・教育職をめざす人のABA入門』,ふくろう出版. /中丸 茂(1999)『心理学者のための科学入門』,北大路書房. /</p>			

30 シラバス 教育福祉学専攻

Pierce, W. D. and Cheney, C. D. (2008). Behavior analysis and learning. 4<sup>th</sup> ed. New York: Psychology Press. この他、授業の進行状況に応じて適宜紹介する。

学生に対する評価：

授業中のディスカッションへの参加内容 50% レポート課題 50%として評価する。

授業科目名：教育評価・測定法	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：井上俊哉
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>「教育」あるいは「心理」について、誰もが自分なりの意見や考えを持っているだろう。しかし、自分の主観や印象を論じるだけでは、現象についての理解を深めること、真実に近づくことはできない。価値のある問題を発見し議論を深化させるためには、適切な証拠を提示し、その証拠に正しく依拠することが大切である。本当の意味で教育学や心理学を修得するためには、用いる証拠の種類やそれらの用い方を学ぶ必要がある。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>指定の教科書を読み進める。重要な点については、さらに詳しい文献を読んで、理解を深めていく。教員側からの一方通行の講義形式はとらず、受講者からの積極的な発言も求める。予習・復習を怠らず、自ら学ぶ気持ちを持って授業に臨んでほしい。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：測定と評価</p> <p>第2回：教育評価と心理測定のための統計（得点分布、平均と標準偏差）</p> <p>第3回：教育評価と心理測定のための統計（z得点、偏差値）</p> <p>第4回：教育評価と心理測定のための統計（相関）</p> <p>第5回：相対評価と絶対評価</p> <p>第6回：絶対評価のためのスタンダード</p> <p>第7回：項目分析の方法</p> <p>第8回：テストの信頼性</p> <p>第9回：テストの妥当性</p> <p>第10回：絶対評価における信頼性・妥当性</p> <p>第11回：知能・性格の心理学</p> <p>第12回：テストの実際（知能テスト）</p> <p>第13回：テストの実際（性格テスト）</p> <p>第14回：教育評価と心理学</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：毎回の授業の学修内容について、次回の授業までに要点をまとめて提出すること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>西村純一・井森澄江「教育心理学エッセンシャルズ・第2版」（ナカニシヤ出版）</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>梶田叡一「教育評価」（有斐閣），日本テスト学会「見直そう，テストを支える基本の技術と教育」（金子書房），その他。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業中の発言（50%），レポート（50%）によって評価する。</p>			

授業科目名：検査法演習	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：井森澄江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>代表的な心理検査についてその理論的背景、実施法を学ぶ。心理検査を用いたアセスメントの特徴について知る。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>心理検査を使う最終目標は、他者や自己を理解するという実践的なものであるが、なぜ心理検査で知的能力や性格を測定できるのかという理論的背景を知らずにこれを利用することは危険である。この授業ではいくつかの代表的な心理検査について、理論的な知識を持ったうえで有効性や限界などを検討しつつ、その実施法・利用法を学ぶ。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：心理検査とは</p> <p>第3回：知能検査</p> <p>第4回：田中ビネーVを学ぶ I；その特徴と実施法</p> <p>第5回：田中ビネーVを学ぶ II；分析と解釈</p> <p>第6回：WISC-IIIを学ぶ I；その特徴と実施法</p> <p>第7回：WISC-IIIを学ぶ II；分析と解釈</p> <p>第8回：WISC-IVを学ぶ</p> <p>第9回：K-ABCおよびK-ABC IIを学ぶ I；その特徴と実施法</p> <p>第10回：K-ABCおよびK-ABC IIを学ぶ II；分析と解釈</p> <p>第11回：ITPAを学ぶ</p> <p>第12回：性格検査</p> <p>第13回：発達検査・その他の検査</p> <p>第14回：心理検査によるアセスメントについて</p> <p>第15回：まとめと討論</p>			
<p>準備学習：授業前には指定した手引き、解説を熟読してくること。</p> <p>授業後にはレポートを提出すること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>各種テスト手引き、解説</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業中の発言・行動(70%)，レポート(30%)によって評価する。</p>			

授業科目名：高齢者心理学特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：西村純一
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>① 心身の加齢変化の理解。</p> <p>② 成人期の発達課題と人間的成長の理解。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本授業では、若い成人から高齢者に至るまでの心身の加齢変化を理解するとともに、高齢者の心身の特性を理解する。また、若い成人期、中年期、高齢期、それぞれの発達課題を理解するとともに、それぞれの発達段階における人間的成長についてコースワークの授業として学ぶ。そして、成人期から高齢期にかけて遭遇するさまざまなストレスにいかに対処して、健康長寿、幸福な老い、アクティブ・エイジングを目指していくかについてリサーチワークの基礎として考えていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：イントロダクション</p> <p>第2回：成人発達・老年発達の研究方法</p> <p>第3回：身体的老化、生活習慣病</p> <p>第4回：感覚・知覚の老化、注意・事故</p> <p>第5回：記憶力の低下、認知症</p> <p>第6回：知能・創造性・知恵</p> <p>第7回：パーソナリティの変容：特性・類型</p> <p>第8回：パーソナリティと適応：自我発達</p> <p>第9回：老いと仕事、社会参加、遊び</p> <p>第10回：老いと人間関係、家族関係、友人関係</p> <p>第11回：老いとストレス、ストレス対処</p> <p>第12回：生きがい</p> <p>第13回：幸福な老い</p> <p>第14回：高齢期のポジティブ心理学</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>文献によるエイジングや老年心理についての基礎的な理解1時間、復習としてノート整理1時間</p>			
<p>テキスト：「成人発達とエイジングの心理学」ナカニシヤ出版</p>			
<p>参考書・参考資料等：Adult Development and Aging (7th Ed)</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>毎回の出席、質疑へのコミット、レポートなどを総合的に評価する。</p> <p>質疑へのコミット0.4、レポート0.6</p>			

授業科目名：社会調査法 I	単位数：2単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名：山本和人
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>社会の様々な実態を把握するために必要とされる社会調査の方法を理解し、自ら実施できるようにするとともに、諸機関で実施された社会調査の成果を批判、検討し、きちんと読みとることができるようにする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>教育学や社会福祉学、心理学にも共通する研究方法としての社会調査法のうち、「質問紙調査法」(面接調査を含む)について理解する、各自の関心に基づいて、仮説を形成し、調査対象の選択から、質問紙の作成、結果の分析まで、実習・演習を取り入れ、ひと通り実践的に理解する。修士論文の作成や、課題研究などに取り組む際、その研究方法を十分理解していない場合や、さらに、社会調査、質問紙調査について感心があり、理解を深めたい場合には特に必要とされる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：社会調査の意義・目的と限界</p> <p>第2回：社会調査の原理と留意点</p> <p>第3回：社会調査の方法と種類</p> <p>第4回：社会調査の手順と計画の立案</p> <p>第5回：資料分析と仮説の形成</p> <p>第6回：理論構築と調査仮説の検討</p> <p>第7回：サンプリングの理論と方法</p> <p>第8回：調査票作成上の留意点と課題</p> <p>第9回：分析の方法と理論</p> <p>第10回：必要とされる基礎統計とその理解 (1) 分布と集団特性値、基礎統計</p> <p>第11回：必要とされる基礎統計とその理解 (2) 集団間の関係と相関係数等</p> <p>第12回：必要とされる基礎統計とその理解 (3) 変数間の関係と予測</p> <p>第13回：検定についての理解</p> <p>第14回：多変量解析のいくつかとその留意点</p> <p>第15回：社会調査をめぐる倫理と調査報告のあり方</p>			
<p>準備学習：各自の関心を踏まえ、事前に各回の内容まとめを作成し、ポイントとなる点をおさえておく必要がある。そのやり方等の詳細は初回に伝える。必要な時間は毎回1、2時間が必要であろう。事後についても作業を伴う学習を必要とする。</p>			
テキスト：未定			
参考書・参考資料等：未定			
<p>学生に対する評価：</p> <p>社会調査を自ら実施する上での心構え、実施方法、分析方法等を理解するとともに、他の調査主体が実施した社会調査とその結果を分析し、正しく評価できることが求められる。毎回の課題30%、小レポート30%、最終レポート40%で評価する。</p>			

授業科目名：社会調査法Ⅱ	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：山本和人
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>質問紙を用いた大量観察による定量的調査方法と異なり、現象を理解し、解釈し、そこから理論を構築する方法としての質的研究方法である質的調査法が使えるようにする。その理論と技術の基本を習得できるようにする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>教育学や社会福祉学、心理学にも共通する研究方法としての社会調査法のうち、質的な研究についての方法を理解する。サンプルが非常に限定された事例研究の場合や、文字テキストや語りの内容分析、言葉のやり取り、インタビューなどの、数量的にとらえることよりも質的な分析が重要である場合の研究とその方法について、修士論文作成や課題研究に取り組む方法としての「社会調査法」を理解する。授業については、一方的な講義ではなく、学生の関心を踏まえ、実習・演習方式を取り入れて行う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：質的調査法と量的調査法の特徴と違い</p> <p>第2回：研究プロセスと質的研究の位置づけ</p> <p>第3回：質的調査法とは何か</p> <p>第4回：質的調査法の種類（1）インタビュー調査</p> <p>第5回：質的調査法の種類（2）参与観察法</p> <p>第6回：質的調査法の種類（3）ドキュメントの分析</p> <p>第7回：質的調査法の種類（4）映像データの分析</p> <p>第8回：質的調査法の種類（5）音声データ、会話の分析</p> <p>第9回：ケース・スタディについて</p> <p>第10回：研究のデザインとサンプルの選択</p> <p>第11回：観察者としての留意事項</p> <p>第12回：データ収集と分析について</p> <p>第13回：妥当性、信頼性の問題</p> <p>第14回：報告書執筆と理論構築</p> <p>第15回：調査者としての倫理</p>			
<p>準備学習：各人関心・調査対象を踏まえ、事前にポイントをまとめておく作業が必要になる。そのため、各自の関心や調査テーマに応じた準備作業が求められる。また、事後についても同様である。</p>			
テキスト：未定			
参考書・参考資料等：未定			
<p>学生に対する評価：</p> <p>質的調査方法を理解し、自分で実施することができる知識を得られたかどうか、また、理論構築につながる調査がどのようなものかを理解できたかどうかによって評価される。毎回の課題30%、小レポート30%、最終レポート40%の割合で評価する。</p>			

授業科目名：心理学研究法 I	単位数：2単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名：井森澄江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>この授業では心理学研究の原理・方法について学び、人間を科学的に見る力を獲得することを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>「ある」けれども「実体としてしめすことのできない」人の心を心理学は研究の対象にしている。そこで、心の研究を進めるために心理学はさまざまな研究法を発展させてきた。心理学研究法 I ではこの多彩な心理学の研究法について、実験、観察、調査という代表的な研究法を柱に整理しその中に新しい研究法の流れのいくつかを取り上げ、その意義と限界を検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：心理学の研究と心理学の研究法（1）実証研究の論理</p> <p>第2回：心理学の研究と心理学の研究法（2）研究法とその選択</p> <p>第3回：実験法の基本的考え方</p> <p>第4回：実験計画法（1）研究計画の進め方</p> <p>第5回：実験計画法（2）要因計画法の手順</p> <p>第6回：実験室実験、現場実験、アクションリサーチ</p> <p>第7回：観察法の意義</p> <p>第8回：観察法の実際（1）観察方法と記録法</p> <p>第9回：観察法の実際（2）実践例と留意点</p> <p>第10回：観察、面接、フィールドワーク</p> <p>第11回：質問紙調査法の特徴</p> <p>第12回：質問紙尺度の構成（1）質問紙調査研究の流れと標本抽出法</p> <p>第13回：質問紙尺度の構成（2）心理尺度の構成</p> <p>第14回：研究の倫理</p> <p>第15回：まとめと討論</p>			
<p>準備学習：授業前には指定した資料・文献を熟読してくる。授業後にはレポートを提出すること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>心理学研究法入門（東京大学出版会）</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業中の質疑応答（70%）、レポート（30%）によって評価する。</p>			

授業科目名：心理学研究法Ⅱ	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：井森澄江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>この授業では心理学研究の原理・方法について学び、人間を科学的に見る力を獲得することを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>心理学研究法Ⅱでは特に観察法、教育的介入法、事例研究、心理検査法を取り上げる。これらは教育・支援現場において心を捉える重要な方法といえよう。研究テーマを選んだうえで、これらの方法のうちの一つかを用いてデータを取り、分析を行いレポートにまとめる。その過程で具体的手法を学ぶとともに、それぞれの長所を利用して心をいかに理解できるか検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：観察法</p> <p>第3回：集団場面における幼児の行動分析の実際（1）記録法</p> <p>第4回：集団場面における幼児の行動分析の実際（2）分析とその妥当性・信頼性</p> <p>第5回：教育的介入法</p> <p>第6回：教育的介入法による研究の実際</p> <p>第7回：事例研究</p> <p>第8回：事例研究のタイプとその実例</p> <p>第9回：心理検査法</p> <p>第10回：人格検査（1）質問紙法</p> <p>第11回：人格検査（2）投映法</p> <p>第12回：知能検査（1）ビネー式とウェックスラー式</p> <p>第13回：知能検査（2）WISC-IV、K-ABC、K-ABCⅡ、ITPA</p> <p>第14回：心理検査によるアセスメントについて</p> <p>第15回：まとめ（倫理的問題と討論）</p>			
<p>準備学習：授業前には指定した資料・文献を熟読してくる。授業後にはレポートを提出すること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業において資料を配布する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業中の発言・行動（70%）、レポート（30%）によって評価する。</p>			

授業科目名：研究指導 特別研究	単位数：10単位	必修	担当教員名：5名
<p>授業の概要（研究指導は2科目のいずれかを選択必修。） 教育学及び社会福祉学、心理学分野とその隣接領域に関して、研究の実践、指導を行い、またこれらについて論文指導を行う。</p> <p>（井森澄江） 子どもの社会的発達に関心のある学生を対象に、個別に研究テーマを設定し、その研究テーマに関する修士論文の作成を目指して指導する。</p> <p>（平戸ルリ子） 子どもの支援、中でも社会的養護を必要とする子どもの支援について、研究テーマを設定し、修士論文の作成を指導する。</p> <p>（山本和人） 成人の学習・教育、及び家庭教育や地域社会における教育について関心のある院生を対象に、各人の関心から研究テーマを設定し、修士論文の作成を指導する。</p> <p>（佐藤隆弘） 福祉・教育に関わる問題について、心理学の観点から分析することに関心がある学生を対象に指導を行う。設定したテーマをもとに研究計画を立て、データの収集と分析を行い、論文作成を進める。</p> <p>（田中恵美子） 障害（身体または知的）に関する支援及び政策等に関心のある学生を対象に、各自の問題関心に合わせてテーマを設定し、修士論文の作成を指導する。</p>			

授業科目名：研究指導 課題研究	単位数：6単位	必修	担当教員名：5名
<p>授業の概要（研究指導は2科目のいずれかを選択必修。） 各自の関心に基づき、教育学及び社会福祉学、心理学分野とその隣接領域についての研究課題、検討課題を設定し、そのための方法等を指導するとともに、スケジュールを立て、報告書作成の指導を行う。</p> <p>（井森澄江） 研究テーマを明確にしていくために先行研究に関する討論を行う。その上で、研究計画と研究方法について検討し、報告書作成に繋げていく。</p> <p>（平戸ルリ子） 研究テーマを明確にしていくために、社会福祉領域の基本文献を読み、さらに先行研究についての分析を行う。その上で、自らの研究計画をたてられるようにする。</p> <p>（山本和人） 教育学及び社会教育学などの分野を中心として、広く教育に関わる事象について、各自の検討課題に基づく研究テーマを設定し、研究計画と研究方法を検討し、課題分析を行い、報告書を作成する。</p> <p>（佐藤隆弘） 教育や福祉に関する心理学、特に行動分析学の先行研究を調べ、文献内容の発表、議論を通して研究方法について理解を深める。また、これらの課題を通し自身の修士論文の研究計画へと繋げ、報告書にまとめる。</p> <p>（田中恵美子） 修士論文の目的明確化、および研究方法の習得を目指し、先行研究のレビューを行う。また、研究計画を明確化するにあたり、現場での実践にも携わり、実現可能性の見える研究計画の作成と論文化が行えるようにする。</p>			